

第三部 パネルディスカッション

李

それでは、時間がまいりましたので、第三部に入ります。先ほどお願いしましたように、まずお三人のパネラーの先生のうち、今岡先生の方から、武本先生、栗屋先生のご講演に対するコメントを簡単に頂くといいところからお願ひしたいと思います。あとは順番にマイクを回して行ってください。

今岡

昨日のフェイスブックでかなり炎上している問題ですが、今年は特に、大気汚染がひどく、前に立っている人と話をするにも見えない、それぐらいひどい状況だと書かれています。その中で、ある若い人たちが、この状況をなくすには、クリーンなエネルギーの原発を選んだ方が言い、原発はクリーンじゃない、と炎上していました。先ほどの報告を聞いていたら、火力発電所からの煙よりもゲル地区で直接燃やしている石炭の方が、大気汚染の原因としては大きいということのようです。モンゴルの政治家の中には、火力発電よりも原発という選択をするために、大気汚染を利用しようとしていると思える意見があります。だから、今日のご報告をモンゴル語に訳したいと思えます。実際に行かれてみて、モンゴル人は、大気汚染の原因は火力発電だと思っている人が多いでしょうか？これがお聞きしたいことの一つです。

それから、栗屋先生の方、今日はあらためて勉強になりました。よく主体の形成という言葉があり

ます。リーダーの養成という言葉があるし、行政とか政治に参加するという言葉があります。私は、とても違和感があります。近代社会の前の時代、農業が中心の社会は、村を単位にした共同体で、みんないろんなことに参加していたはずなのに、なぜ近代社会になって、民主主義になったのに、今頃、「参加」とか「主体形成」という言葉を使わないとみんな参加しなくなったのか。自分の問題なのに、どうしてそれをしようとしなくなったのか、大変不思議に思っています。日本とかモンゴルとかいろいろな国をご覧になって、もしどこかの国はそういうことなく、うまくみんなが主体的に社会をつくっているよという近代社会がありましたら、教えていただきたいと思えます。

李

そうしましたら、あとで分かりにくくならないように、お一人ずつにお答ください。ではまず、今しがたの今岡先生のご質問にお答ください。

武本

火力発電所が大気汚染の原因かというのですが、ウランバートル市に関しては一五%ぐらいなので、そんなにひどくない。結局火力発電所に関しては、資金さえあれば脱硫、脱硝、除塵装置、電気集塵機とかいろいろな装置がありますが、それを付けられるので。日本の場合ですと、ほとんど四日市の場合は、脱硫、脱硝、電気集塵機全部付けていますから、そういう意味ではかなりクリーンな排ガスを出しています。ということなので、例えば脱硫装置だけでも九九%取っています。だから、硫黄分

も飛んでいない。

それから、もう一つ、火力発電所の場合、燃料転換で、四日市に川越火力発電所がありますね。あそこだと液化天然ガスを、中東のカタールから輸入している。要するに、クリーンな天然ガスを使うとか、そういう方法があります。クリーンといってもCO₂は出ますが、S分に関してはクリーンであるとか、あまり煤塵を出さない燃料にするということではできますので、火力発電所自体も燃料転換をすれば大丈夫です。その燃料転換と、いろいろな装置を付けるということで、石油を使う場合、あるいは石炭を使う場合でもそうです。中電の碧南火力発電所というのは、世界一クリーンな石炭火力発電所です。この伊勢湾の対岸にあります。そこもほとんどSO_x、NO_x、PMを出していません。そういう技術は、日本は持っています。それはちょっとお金がかかりますが、できないことはない。先ほどの石炭燃焼でもできないことないということがあります。

ですから、火力発電所が原因とは思いません。むしろゲルのストープをどうするか。政府の大気汚染低減委員会が考えているように、そういうことだと思えます。

一一七番とか五三番は聞いてないですが、新モンゴル高校というのがあります。その生徒さんが結構いろいろと、うちの大学の学生ともコミュニケーションしているのですが、彼女、彼らに聞く、結局、大気汚染の原因はゲルと明確に把握しています。分かっています。だから、むしろ学生、生徒さんの方がよく分かっているという気がします。そういう印象です。

ですから、解決方法はいくらでもある。ただ、ゲルに関してはどうするかという大問題があって、それは先ほど今岡先生からあったように、むしろ分散化しなければ駄目だと思います。それができな

いようであれば、集合住宅化する。集合住宅で中小ボイラー燃焼にして、ボイラーで除塵をすれば、何とかなりますのでそういうふうにする。方策はいろいろあると思います。ただ、どれを取るにしても、結局資金が要りますよね。その問題が大きいと思います。日本のJICAがいろいろな協力していると思いますが、そういうこともいっぱいありますので、解決策はあると思います。

粟屋

まったく言われるとおりで、私自身こういう言葉「主体の形成、リーダーの養成、主体性、参加など」には少し違和感を感じています。しかしこれらの言葉は書かざるを得なかったものですから使いました。タイトル自身もそうですし。

ところで近代以前とか言われたのですが、私はもっと過去にさかのぼった所にベースを置かないと、本当の今の世界の問題は解決していかないんじゃないかと思っています。ただ、なかなかいい言葉がない。私は自発性という言葉をより好みますが、その出発点は、ある意味では生命、命です。そこまですれば本当に対等平等になる。その命が輝いているということ自体が素晴らしいんだというような価値観を共有できるかどうかです。

例えば私が割と好きなのに、ネイティブアメリカンの言葉があります。大地は母親と同じだ。母親を売るということを誰がしますか。母親を売らないのと同じように、土地はみんなのものだから、売ってはいけない。売買の対象にしてはいけないんだという言葉です。

それから、あれはカナダの方だったかな。ある土地、そこをネイティブの人たちが墓地にしていた

所なのですが、そこに博物館をつくりたいと白人たちが話を持ってきたんです。墓地といっても、うっそうと草が茂っているような所です。それで、住民の代表と白人たちが一堂に会して議論をした。けれども、住民の代表や長老たちはほとんど何も喋らなかつた。白人たちは、こういった補償をするとか、金額はどのぐらいにするとかというのをいろいろ提案した。最後に長老が一言言った。皆さんはお金の話しかしない。私は魂の話がしたいんです。ここには祖先の魂が眠っているんだ、ということをお言われたんですね。だから、そこら辺が分かり合えるような人間にお互いならなければ、根本的な地球環境問題の解決は難しいなとは思っています。

エネビシ

私自身の感想と、二人の先生の発表を聞いて私たちの活動にどういうふうにつながっていけばいいかと思ったことを、話したいと思います。エコグループの皆さんがこのように言っています。「私たちは環境保護、環境改善のリーダーとして地域住民に情報提供とか、地域住民を引っ張っていくことを目指しているのですが、まず最初に私たち自身も、私たちが巻きまく環境問題は何かであるか、その原因は何であるかを、根本的に分かたうえてやらないと、私たちも分らないところがたくさんある」ということを主張しています。ですので、エコグループの皆さんに情報を提供するの、私が日本に留学していることの一つの使命だと思っているから、武本先生の調査を訳して、情報提供として届けたいと思います。

栗屋先生の発表のところで私が感じたことについてです。今、ウランバートルの大気汚染問題は、

毎年にわたって国がたくさん予算を付けて、改善するためにいろいろ試みているのですが、なかなか解決されません。だから、なぜウランバートルにこんなに人口が集中することになったか、なぜこんないろいろな環境問題が起こっているかという、その原因、根本的なところまでさかのぼって、それを確認して、解決方法を考えていかないと思います。私もこれから研究したいと思っています。テーマは、ここなのです。

そこで、自発的に活動するために、自分からやりたいと思ってやらないと、それは長く続かないという話が、粟屋先生の発表の中に出ていました。モンゴル人は遊牧社会の中に共同体として力を合わせて、自然と対立して暮らす中で、自発的にやってきた歴史もあります。日本で地元学という自分たちの持っているいい点を生かすやりかたがあり、水俣市にそのような運動があったと聞きました。そのように、自分たちの持っているいいところを確認して、生かしておいて、日本を含めて他の海外のいいところも、それに加える。そういうふうに行っていくことが、持続的で自発的な発展になるんじゃないかと思っています。それを目指して、これからの私の研究テーマも考えています。なので、すごくいい勉強になりました。ありがとうございました。

李

武本先生、粟屋先生の方から、エネピシさんのコメントを受けて、何か特に追加のコメントはございますか。なければまた後ほどで構いません。では、柴田先生、お願いします。

柴田

一つ素朴にまったくの素人としてお伺いしたいことが、粟屋先生にございます。CO₂の話が出てきたのですが、今原発の話がありました。原子力発電というものが、実は長期的な廃棄物の管理とか、事故の場合とか、また、温水を出すことによって、海の水を熱くする、そういうことで結局原子力もCO₂を出すということを前提としての話なのですが、CO₂が温暖化の原因で、CO₂だけを特に問題にしていくと、それでは原子力を使おうという議論になってしまうという気もするんです。これは私だけが言っているんじゃないくて、一般に言われていることで、ちょっと教えていただきたいということ。むしろモンゴルの資料を拝見いたしますと、CO₂を出すかどうかということも、直接のいろいろな対策があると思うのですが、生活全般を変えていくということの方が、CO₂、温暖化という一つだけを取り出してやるより、重要じゃないかという議論があると思います。そのあたりのご意見を教えていただければありがたいです。

粟屋

CO₂：「というトピックス」を出したのは、一つの典型として直接的で分かりやすいと思ったからです。産業革命以降の人間の生産活動。これが、例えば大気の組成そのものを変えていっている。大気中の硫黄の濃度なんかですと「産業革命以前と比べると」もう二倍になっています。そういう一つ一つの事例を挙げる代わりに、CO₂であれば非常に馴染みがあり、なおかつたまたま温度と良くタイアップして変動しているから温暖化で実感しやすい。メタンなんかも同じですが。

さらに、言われるとおり生活様式そのものを変えていくべきと思います。CO₂は一つには化石燃料の浪費ということですが、そういうものに象徴されるような全体的な大量生産、大量消費型のやり方。過去に蓄積されたものをどんどんどんどん取り出しては、一時的な便利さとか、利潤追求とか、そういう観点だけで動かしている。それに歯止めをかけなければ持続可能な社会は実現しないということです。

李

五人の先生、どうもありがとうございました。今、会場から質問を頂きました。すぐにはお答え頂けないかもしれませんが、質問対象の先生ごとに分けさせて頂いておりますので、ちょっと見てお考えください。

それで、これからは、先生方同士の間でさらに聞きたいとか、そういうことも含めてご自由に発言して頂きたいと思います。また、会場の方からも学生も含めて、話の中でさらにまた聞きたいというようなことがありますら、それを覚えておいて頂き、後でまた手を挙げて教えて頂ければと思います。どうでしょうか。時間は、四時ちょっと過ぎまでを予定していますので、準備のできた先生からお話しくださればと思います。

武本

僕から行きましょう。ICEET側からのご質問です。新型と旧型ストープの改良点。僕は中身的

にはよく分からないのですが、燃焼効率が非常にいいということになっているようです。旧型の場合は、空気の流れが悪かったのです。新型の場合は、多分そこも結構空気が入るように、かさがあって高いですから。だから、多分空気をちゃんと入れて、燃焼を完全燃焼に近い形で石炭を燃やすんじゃないかという気がします。だから、当然煤塵も出にくくなるんじゃないかということですが、

それから、簡単な排煙浄化装置のようなものは、ゲルストーブに付けられないかというのですが、やってみる価値はあります。要するに、それがどのぐらい取れるかというのは、多分排煙が抜けないとまずいので抜ける形で、しかも取れるかどうかという実験を、やってみる価値はあるかと思えます。これは面白いですね。どこかそういう装置つくってないですか。世界中の技術でそれを探してみても、小型ストーブを特に対象にしているかですね。それは日本でもあると思います。これは確かに研究する価値があります。

それから、もう一つ、ゲル内ストーブでごみ焼却をしている。確かにしています。紙とか燃えるものは全部、それからペットボトルもストーブへ捨てていますね。結局燃やしちゃう。だから、ごみ焼却炉になっています。それは良くないので、日本でいうところのごみの分別ですかね。その辺のシステムをちゃんと作らないといけない。

それで、モンゴル科技大の加茂先生に、二〇一一年前後にお会いしました。彼が言うには、結局モンゴルの環境問題は、行き着くところはごみ問題だと言うのですよ。結局、ゲルのストーブの燃焼の話かと、僕も当初思ったのだけでも、ゲルストーブを改良すればいいのかなと、僕も最初思ったのですが。彼がそこまで言っちゃっているので、よく分からなかったのですが、結局調べれば調べるほど、

分別をしなければ駄目だということですね。何でも燃やしてしまうというのは、非常に良くないです。ダイオキシンも出ます。彼もダイオキシンを非常に気にしていて、ごみ処分場のダイオキシン問題とか、結構調査されています。日本人なのですが、モンゴルに移住して、モンゴルの科技大の先生をやっています。そういう方もおられます。彼とも個人的にだいぶいろいろとディスカッションしましたが、そういうことを言っていました。それはあります。だから、その辺がほしい何割ぐらいかというの、よく分からないですね。僕も把握できません。

ただ、先進的な例えばTCDのエネビシさんのところみたいに、分かっている方がたは燃やしてないのですが、他の方は燃やしているという噂を聞いていますので、それがちょっと問題かと思えます。

最後のご質問で、古タイヤもそうです。古タイヤを燃やしちゃっているというのもあります。それは栗屋先生が結構心配されていて、ダイオキシンが非常に出るだろうから、これを何とかしないといけないということがありましたね。そういうことです。これもどのぐらい使っているかとか、どれだけ売れているかというデータはないでしょうから、分からないですよね。結構日本の中古車がいっぱい走っています。中古のプリウスは、燃費がいいですから、大活躍しています。モンゴルはガソリン高いので。生活水準というところを見ると、ガソリンは非常に高いと思います。僕の方は以上です。

栗屋

それに関連して、最近、四日市公害がひどかったときに、塩浜病院の先生を四年間やっていた人の

話を聞きました。その方は当時、流産とか無脳児、脳が無いとか、そういう例がすごくたくさんあって、とてもびっくりした。彼はそこに四年しか居れなかったのですが、その後桑名の方の病院に移ったが、そこではこのような事例はほとんどなかった。そこで大気汚染が関係しているんじゃないかと言っていました。

私の方への質問、というよりこれは感想なのですが、その中で女性の労働者が日本でも進出が少ないから、もっと活躍できるようにというのがありまして、男女同権などより女性が活躍できる場を多くつくる方策を考えないと、日本はやっていけないのではないかと思いますというのが書いてあります。私、このことの関係で、柴田先生にお聞きしたいなと思っています。先ほどの話の中で、ジェンダーの平等という議論と、少子高齢化の社会の中で、どう進めていくのか、これが対立したと。平等云々というのと、もう一つのポイントが対立していて、最終的には三重県の場合は少子高齢化というそちらの方の流れになって、男女共同参画。この言葉は日本全体が男女共同参画の方になっていたと思うのですが、私はこれ別に対立するようなものじゃないかと思いませんか。女性の人権や平等ということと、少子高齢化社会の中でもっとみんなで一緒にやりましょうよということとは、何ら対立しないんじゃないかと思うんだけど、なぜそれが対立になったのかというのを、簡単に今教えてもらえるのでしたら、教えてください。

柴田

実際、事実として対立したというのが、まず第一です。例えば、少子高齢化対策であれば、働いて

いても、働かずに子どもを生んでもらってもいいんだけど、働く人が多いというのであれば、働けるようにして、産んで育てられる環境をつくりましょうという限りの女性の働く権利です。介護でも、女性だけではとてももたないようになつたからどうするかという、男性中心社会の許す範囲内で考えるのか、それとも女性がいろいろな形でいろんなところに参画できていないのを、根本的に変えるというのとは違うわけです。単に子どもを増やすために、たくさん子どもを産める環境をつくりましようと言われると、女性は子どもを産む機械ではないわけですから、自分たちの産む権利、あるいは産まない権利を主張する人たちも出てきます。いい悪いは別にして、そういう形で、ある部分共通するところから法律ができて、条例もできました。その中では、少子高齢化で効果があるから女性の社会進出と家庭の平等を主張するのか、それともジェンダー平等の社会を築くのかということで、対立があつて、その結果が法律とか条例とか具体的な施策になつて、今動いている状態だと、私は理解しています。

今岡

では、私の方で。遊牧民なのに、なぜランバートルに集まってくるのかということですが、これには何段階かあるのですが、一九九九年に大雪害が起こつて、家畜が大量死することがありました。それでよく地方から遊牧民がランバートルに移住してきたと言われるのですが、実際に調査をするところではなくて、地方の定住地に住んでいて、家畜の畜産物を売買する人たちが、仕事を失い、ランバートルにやってくるというのが、最初の大きな流れです。

それから、社会主義の時代は、教育や医療において、都市と地方の間で格差を作らないように、若い医師や優れた教師を派遣する制度がありました。中国では「下放」と言います。市場経済になってから、そういう強制的なことをやらなくなったので、教育や医療の都市と地方の格差が、はっきり出てきました。地方に住む教師や医師も、自分の子どものために、ウランバートルに移住するようになります、その後を追いかけるように住民も移動を始めました。たとえば、英語のネイティブの教師の授業を受けようと思うと、郡よりも県の学校を選択することになり、移住するのです。遊牧民であっても、子どもにいいチャンスを与えたいという親は、ウランバートルの近くまでやって来るということもあります。最初は遊牧民が直接来たわけではありませんが、最近では遊牧民でも、より良い教育や福祉を求めて、ウランバートルまでやって来ることがあります。子どもたちだけ、進学のためウランバートルで住み、親が田舎から肉やお金を送るということはよくあります。

それから、ジェンダーについて家庭の中の問題については、日本とモンゴルの違いは分かりましたが、例えば企業とか政治や教育で、どういう問題がありますかという質問ですね。女性の社会進出という言葉は、日本ではありますが、モンゴルにはありません。モンゴルは封建時代から社会主義の時代へと、資本主義の時代を経ずに移行しました。だから、資本主義の時代に大量に作り出されるはずの労働者がいませんでした。それで封建的な社会から男女平等が前提に、社会主義による近代社会をつくるのが進められました。だから、近代的な制度をつくる時にも、学校を作る時は、女の子もそこで勉強することを前提にしていましたし、工場を作る時も、女性が働けるよう保育園や幼稚園も作りました。社会主義の時代には、男女が同じ能力であれば、積極的に女性にチャンスを与えるという

こともしました。それが七十年間の経験です。普通の家庭でも、男は力があるから、最終的には遊牧民で暮らしていけばいいけれども、女の子は力がないから、教育を付けて、まちでも働けるようになると考えます。女の子に積極的に教育を付けてきたので、都市に多くの人が住むようになった今でも子どもの内、女の子を高学歴に、という意識が親にはあります。

社会主義の時代は、大学を卒業したら、その専門で必ず就職ができました。就職できないことがあり得ない社会でした。市場経済に入ると、そういう保証が何もありません。大学進学率は女子学生のほうが高いので、女子の就職率が悪いということになっていきます。そういう意味では、就職する機会などに不平等な状況が出てきています。しかし、女性社長もいますし、社会主義の時代からそうなのですが、医科大学は七割が女子学生です。医師や教師は女性の仕事だと思われています。さっき日本の三重県の例がありました。そのトップというのは女性が出てきます。頭を使う仕事は、まモンゴルでは女性の仕事です。企業でも女性社長のいる企業は、細かいところに行き届くし、男性社長の場合は、飲んだら次の日、出て来ないというだらしないところがあるので、女性社長のいる会社は信頼され、大きな規模でなくても、生き残っている企業がたくさんあります。

遊牧社会では、性別役割分担があり、女の子には搾乳を教えます。男の子は大きなラクダとか馬とかを集団で連れてくるとか、力のいる仕事をするように育てていきます。女の子は小さな仕事をたくさんこなすようにしつけられるので、田舎では女の子の方がちゃきちゃき動きます。男の子の方がゆったり動きます。そういう意味では、女の子に仕事の負担が多くなるかもしれません。遊牧社会で生まれてない都会生まれの子でも、女の子と男の子の間の動き方が相当違っていて、それが仕事の仕方に

も反映しているようにと思います。

エネピシ

まず、地域住民が環境問題を生活実感として感じていないのかという質問がありました。ゲル地区には大気汚染のことももちろんですが、水のこと、井戸から水を汲んで飲料水として使っています。あとは、国が地下水を掘って井戸を作っているのもあれば、個人でそんなに深く掘らなくても、少しだけ掘るだけで、水が出る所で水を出して、それでその水を使っている所も結構あります。それによって結核（TB）が広がるという問題、公衆衛生の問題がよくあつたりします。それは季節によって違って、特に春になると結核の普及が高くなっています。

冬は煙によって、特に子どもたちが風邪をよく引いたりするのが現実です。あと、国は環境意識改善、啓発活動をしていませんかという質問です。モンゴルでは特にテレビとか新聞とか、そういうマスメディアでは、徹底的に環境はどういうふうに変わってきているかとか、どのように汚染されているかを、調査をもってその結果などを、徹底的には報告していないところもあります。だから、一般住民も、ちゃんとした情報が行っていないのが現実です。

先ほどの発表の中で、エコグループが作られたきっかけは、ビデオを見たことという話に対して、そのビデオをどこで誰が作成したのかという質問がありました。それは去年から日本の援助で淡水資源・自然保護センターという環境教育を一般の人々に提供していくセンターが、日本の援助でつくられたんですね。そこで作られているビデオでした。それを見て、みんなが刺激を受けたということで

す。

あとは、モンゴルはもともと遊牧文化に根差す、大地に鍬を入れてはならないという考え方が強かったから、多分ゲル地区で最初木を植えたり、野菜を作ったりするときに、最初に受け入れなかったり、自分から動かなかったのは、そういう考え方とつながっているかという質問がありました。それもあると思うのですが、もう一つは、ゲル地区は水がすごく少ないので、木を植えるにしても、野菜を作るにしても、水をたくさん使わないといけない。それで貴重な水を木を植えるときに使うと、ちょっともったいないなということも、最初は考えていて、それでなかなか私たちから、例えば木の苗を配って、これを見んな住んでいる庭の中に植えてみよう、環境改善につながりますからと言っても、なかなか理解してくれないところもありました。でも、それでもやってみて、目の前に春になると木が育ってくる、それも喜びを感じて、そこからどんどんどんどん水が少なくても大事にして育てていくようになってきました。

啓発活動で、どんな方法で啓発しているんですかと聞いています。今のところは、さっき言ったように、地域の環境問題について、ただこうなっているみたいですねと言うより、私たちが調べてみて、こんな状況なんです。だから、私たちはこういうふうに予防していかないといけない、こういうふうに対策していかないといけないということを、情報をもって地域住民と意見交換しながらやっていますという形でやっています。

もう一つは、モンゴルには、千回聞くより一回見て実感した方がいいということわざがあります。エコグループのみんなは、例えばさっき見せることができなかつたのですが、いろいろなイベントと

か、自分たちで見学したこととか聞いたことを、動画にして、それをビデオとして地域住民に見せて、一緒に考えるということをやっていききたい。それを試みています。それに加えて言うと、これから私もそのことに協力して、例えば日本とか他の国の地域住民向けの啓発のビデオとか、いろいろドキュメンタリーがあったら、それもモンゴル語に訳すとか、そういう形でできるだけみんなに実際どうなっているか、モンゴル国内も海外もどうなっているかを見ながら、一緒に考えながら、そこからできることをやっていくべきだと思っています。そんな感じで、動き始めています。

今岡

社会主義の時代と現在の資本主義の時代において、リーダーの資質の違いはありますかということですが、社会主義の時代は、上から任命します。しかし、小学生のときから、少年グループ、青年グループと、エリートを養成するシステムがありました。そこで最終的には党大学、党とは政党の党的ことですが、そこを出た人が行政の長になる、そういうシステムがありました。今は資本主義です。日本のいろいろな経験がモンゴルにも入っていて、青年会議所などの姉妹組織がいろいろ作られています。資本家を育てるシステムはほとんど出で来ますが、なかなか市民活動のリーダーを育てる場については、外国からの援助はなかなかありません。その地域の、社会主義の時代に学校の先生や医師をしていた人などが定年になり、自発的にリーダーになっているのが、今よくあるケースではないかと思えます。

李

どうも先生方、ありがとうございます。いかがでしょうか。会場からもう少し重ねてどうしても質問したいという方がおられましたら。あと、高橋先生とか、何かコメント、ご発言、よろしいですか。質問ばかりではなくて、ご発言でもどうぞ。

参加者

粟屋先生にちょっとお尋ねしたいのですが、多様で格差のない独自の持続可能な社会をつくる努力をするべきだ。この言葉に対しては、誰も反論はしないし、その通りだと思うんですが、私はこの言葉は非常に上から目線の言葉じゃないかと、私は常々思うんです。私もどうしたらいいのかなどは思いつきながら。例えば、アメリカ並みだったら地球は八個要りますよ。ヨーロッパ並みだったら五個です。日本並みでも二個も三個も要るわけです。そういう中で、地球のキャパシティがこれだけだから、持続可能なことにしていかななくちゃいけないのですが、それじゃあアメリカ並み、日本並みの生活を、皆さんは我慢しなさいよというのは、非常に上から目線だと思っております。

例えば、具体的にモンゴルで独自の持続可能な社会というのは、どのようなイメージをされますか。要するに、テレビ、クーラーなど、いろいろ。今日は、この会場は暑過ぎるぐらいですが、異常な暖房、異常な照明、こういうことを私たちはやるけれども、あなたらは我慢しなさい、では通じない。これをカバーしていくのは、技術しかないと思います。ただ技術に追い付かないぐらいの勢いで、いわゆる負荷が増えているから、こういう現状になっているんですけど。先ほどのCO₂と原子力の問

題でも同じですが、理想の社会だけで、ぱっとこういうふうじゃなくて、もう少し突っ込んで、具体的にモンゴルだったらどうというのが、持続可能な社会なのかというような思いとか、お考えがあれば、お聞かせ賜りたいです。

李

どうもご質問ありがとうございます。そうしましたら、今、粟屋先生と、それとご質問の内容がモンゴルだったらどうかということですので、今岡先生とエネビシさんからも一言ずつ、お三人の方に最後、締めのご意見を頂ければと思います。

粟屋

上から目線と言われて、ぎくっとしました。最近私は、いわゆるその地域で持続可能なこと、自然エネルギー、風力とか小水力とか地熱とか、そっち側の方を探るような研究会に出たりしています。また、では四日市ではどうしたらいいのかな、ということがいつも頭の隅にあります。一つ具体的にというのは、そのときその状況によっていろいろあると思うのです。私はここでは、そういう方向へ向かうための意識改革を、とりあえずはちょっと打ち出しておきたい。お金があれば幸せなのか、物があれば幸せというんじゃないんだよという、そこをまずしっかり押さえた上で、じゃあ具体的にどうしていったらいいかというのは、一つ一つだと思えますよ。そのところで私なりに最近では、自然エネルギーという方向に一つ舵を切りながら、目下研究会に出入りしています。

あと、私が四日市に関して思っていることは、コンビナート企業が石油中心から変化しつつあることです。あの場所をどういうふうに変えていくのか。それは住民や市民と一緒に方向を探っていく必要があるんじゃないか。そんなことが私の頭の中に今のところあります。どこまでそれが進んでいるかという点、また話は別ですが。

今岡

モンゴルではいろいろな取り組みが、遊牧民によって行われています。例えば、遊牧民の協同組合をつくって、そこが分校を建てて、お医者さんも呼んできて、一緒に地域共同体をつくることも行われましたし、太陽光パネルに関しては、ほぼすべての遊牧民が、A3、一枚ぐらいのパネルもっていて、灯りと冷凍庫とテレビを動かしています。そういう意味では、世界的には農村の電化は遅れる傾向にあります。遊牧民は太陽光発電をしていますから、脱原発の最先端を行っていると認めます。

ただ、問題は、そういう協同組合をつくっても、市場経済の波に持ちこたえられず、壊されていきます。そこに住む人たちが一生懸命共同の仕組みをつくったら政府が守る、市場の波を止めて防ぐ、そういう規制をつくっていかないと、こういうことがずっと繰り返されるだろうと思います。

エネビシ

モンゴルは、一九九〇年以降は市場経済になり、民主化されて、今二十年以上たっているのですが、

やはり国が発展し、持続的にそれを続けていくべきとすると、今までの二十年間は、発展というのは一方で絶えず進んでいくべきだと思うのですが、モンゴルの場合は、この二十年間では、他方でこういう後ろ向きの面も出てきていると思うんです。例えば、環境を破壊しながら発展するというのは、これも持続可能な発展じゃないと思うし、ウランバートルの場合は、大気汚染とか近代化による問題、環境汚染があるので、他方で、地方では、開発による自然破壊という、二重的な自然環境破壊や汚染があるので、これではもはや発展とも言えないし、持続可能な発展のきっかけとは言えないわけです。

ですから、これをもう一回考え直して、それをもっともってモンゴルの根本的な自然的状況は何かとか、根本的な生活は何かを考えて、それに合うようなスタイルの発展が、持続可能な発展だと思っています。

李

ご質問された方、ご納得いただけるご意見、コメントであったかどうか分かりませんが、確かに持続的発展ということは、今日のこのシンポジウムのテーマに関わって一つの大きな締めくくりとなる、われわれの課題かもしれません。日本にとっても、モンゴルにとっても、その他の国々にとっても、そうかもしれません。その中には、実際、中を覗いてみれば、今日のジェンダー、男性と女性の関係の問題とか、あるいは性別以外の問題も含めて、人間が生活する、生きるという問題などがその中に含まれているわけですから、私たちの課題というのは、これからさらにいろいろと探っていかなければ

ばならないし、取り組んでいかなければならないのだらうと思います。

今日は、ここまででシンポジウムを終わらせていただきます。本当に先生方、聴衆の皆さま、どうもありがとうございました。

モンゴル・ウランバートル市における

環境リーダーの育成と住民活動・女性の活躍

粟屋 かよ子

二〇一三年十二月六日

一、地球環境問題とは何か

- ① 人間の産業・経済活動によって、修復されえないような環境破壊が、ついに地球規模で発生し始めた（例…異常気象↑地球温暖化↑温室効果ガス、核開発↓核のゴミ）
- ② この活動を主導してきた国が先進国となり、環境破壊に導く社会システム、すなわち市場経済第一主義の下における格差社会が形成されてきた
（他国、他地域の犠牲の上に成り立つ経済発展）

③ 途上国の追い上げ↓さらなる環境破壊↓格差の拡大（負のスパイラル）

- ・ 気候変動枠組み条約や生物多様性条約など、先進国と途上国の対立
- ・ 途上国では「まずは経済成長、それから環境保全」
- ・ 「四日市は東アジアの希望の星、ひどい公害も今はきれい」（ある中国人記者の話）
- ・ 温暖化の脅威は途上国からむしばむ（例…フィリピンの巨大台風）

二、途上国における環境リーダーの育成はどうあるべきか

上の認識に立ったとき、先進国・途上国という、この歴史的に形成された構造自体を問い直さない限り、地球環境問題は根本的には解決しない。

このとき、途上国への「支援」のあり方は決定的に重要な意味を持つ。

(一) 対症療法的対策（先進国 ⇓ 途上国）

まずは、現実が発生している被害を食い止めるという緊急の援助活動
食糧援助、医薬品援助、技術援助、絶対的貧困の撲滅、・・・

(二) 意識改革、価値観の転換、新しい価値の創造（先進国 ⇕ 途上国）

・ 全人類が、アメリカ並（地球が八個必要）、ヨーロッパ並（地球が五個必要）のライフスタイルを求めるのではなく、それぞれの地域ごとに、多様で格差のない独自の持続可能な社会を作る努力をすべし。

・ そのためには、GDP、経済成長率などといった経済指標のみでランク付けするという経済第一主義の発想から解放される必要がある。

・ 先進国が途上国に学ぶという側面も決定的に重要（例…オーストラリアの富豪の青年がモンゴルのゲル地区にホームステイし、水の大切さを学ぶ）

(三) 自発性・内発性・自立の尊重

途上国支援で最も尊重されるべきは、その地域の独自性・伝統を理解し、そこにある持続可能な社会への契機となる内発性・自発性を発見し引き出し育てることである。最高の援助は独自の自立した国、地域となるよう支援することである。

内発的發展を（市民が町の主人公に、安易な誘致ではなく企業の市民化を）…宮本憲一

→

「内発的發展とは、西欧をモデルとする近代化がもたらす様々な弊害を癒し、あるいは予防するための社会変化の過程である」…鶴見和子編著一九八九『内発的發展論』東京大学出版会P・43

Cf. ある庭園デザイナーの言葉…地心、石心、木心を生かす

(四) 環境リーダー（群）の育成

リーダーがなぜ必要かと言えば、環境問題の解決には、それを実践する組織が必要であり、その組織的活動が有効に機能するためにはリーダー（群）を必要とする。

リーダーの役割は（理想的には）

- ① 生じている環境問題を科学的に（地球的・地域的・歴史的に）解明する
- ② そこから展望を導き、当面の実践課題を明確にする（Think globally, act locally）
- ③ 課題を実践するための（下からの）主体の形成を促し、これに取り組む。その際、地域に

根ざした内発性を引き出せるか否かが、持続可能性の鍵になる。

- ④ 行政などの上から（外から）の政策とも結び付ける（行政の改革も視野にいれて）
 - ⑤ 組織内部に対しては、個々のメンバーの個性や能力を生かし自発性を引き出す。このとき、課題が達成されれば、個々のメンバーと組織や地域主体の力は自己成長してゆく。自分の力を確信し、成長を実感し、次のステップを踏み出せ、又より高い目標も見えてくる
- 課題が達成されない場合も、すみやかに総括し、その原因を解明し、実践課題の修正など適切に設定し直してゆけば、新たな可能性と成長に結びつく
- ⑥ リーダーを固定的にとらえず、メンバーの全員がいつでもリーダーに代わられるような協力体制を図り、全員がリーダーの気持ちで創造的な活動ができるよう工夫する

三、モンゴル・ウランバートル市（UB市）における試み

〔UB市の大気汚染削減のための総合的な啓発ツールの開発

—環境リーダーの活用による住民意識啓発—〕二〇一二年～二〇一四年…ICETT）

（一）現地調査

健康調査（二つの学校と二つの病院におけるアンケート調査）による分析結果や環境データ・情報の整理によりシミュレーションを行い、大気汚染状況の緊急性の理解を促進する。住民による調査を促す。

(二) 教育現場での取り組み(五三番学校、一一七番学校)：学校は未来の主体を育てる場

・ UB 中心部の学校(五三番学校)とゲル居住区の学校(一一七番学校)を選定し、それぞれ十五名、二十名で構成されるエコクラブを創設。

・ 七年生(十三歳)、八年生の計約三八〇名を対象に四日市公害の歴史や大気汚染の仕組みについて講義をおこなう。

・ エコクラブに対しては大気の簡易測定機器(粉塵測定器、青空カード、SO₂濃度測定、NO_x濃度測定など)を使った実習を実施し、測定機器を与えて継続測定を促す。

・ 測定に止まらず、自主的にエッセイコンテストや発表会などを実施し、上級生や下級生への啓発活動を展開するなどの確認ができた。

(三) 普及セミナーの開催

・ 対象は学校教師・生徒、教育関係機関、市民団体など

・ 四日市公害の歴史、大気汚染の仕組み、大気拡散状況の発表

・ エコクラブや市民団体による活動報告

(四) 地域住民との交流(トルゴイト地区、第三ホロー)

・ GC(ジェンダーセンター)を訪問し、GCの歴史と活動、TCD C(トルゴイト地域づくりセンター)の設立経緯(地域住民による継続的な活動を促すため)を聞く

- ・ TCD C を訪問し、そのスタッフ（エネビシさんはそのプログラムコーディネーター）第三ホロー長、自発的に結成されたエコグループのメンバーと交流
- ・ 四日市公害の歴史の講義と住民によるNO₂簡易測定を実施（生徒も参加）
- ・ 自発的な住民の活動と行政（ホロー長）が協力して、環境問題を含む諸問題を積極的に解決する活動を展開し、全国のモデル地区として宣伝。（エネビシ報告参照）

（五）訪日研修（二〇一三年八月）（ICEETTにて）

トルゴイト地区第三ホロー長、エネビシさん、エコグループのリーダー、五三学校と一一七番学校の教師各一名を招待し、一週間の研修と、今後の計画発表。今岡良子先生による基調講演。現在は、その計画に基づいて展開中であり、来年二月には第二回の普及セミナーを持ち、そこで報告してもらう予定。（エネビシ報告参照）

四、女性の活躍とその意味

- ・ モンゴルにおける女性の活躍ぶりに衝撃を受ける
- ・ 男女平等世界ランキング（一三六カ国中）
日本：一〇一→一〇五位、モンゴル四四→三三位、南アフリカ共和国一六→一七位
- ・ GCSDの歴史、TCD Cの活躍（「住民の意志による参加」を重視）、エコグループ（平均年齢七十歳、十五名のうち女性が十名、リーダーは女性一名）の活躍 ↓ ホロー長とも強い協力関係

・環境と平和の問題／男と女の関係性の問題

環境破壊を進め、戦争を進めてきたのは主として男性である。男性中心の差別社会がもたらしたものである。

社会の歪みは、そのストレスを被る人々の自発性を抑圧する。そこで、その抑圧を感じる人々が解放されるとき、彼らの自発性は、社会の歪みを解決するための強力なエネルギー源になる。

人口の半分を占める女性を差別する社会がまともなはずがない。

この女性のエネルギーを活用することは、持続可能な社会の実現に決定的に重要な役割を果たす。

元南アフリカ共和国大統領ネルソン・マンデラの言葉

「以下のことを、大統領を含めた全ての政府組織が十分に理解することは絶対に重要である…女性が、あらゆる抑圧から解放されなければ、自由は達成され得ない。我が国の女性の状況が急速に改善され、彼女等が社会の他のあらゆるメンバーと対等な形で、生活のあらゆる面で活躍する権限が与えられるのを現実に見ることが出来るまでは、復興開発計画 (Reconstruction Development Program)* は実現しないであろう。」南アフリカ共和国の駐日特命全権大使、モハウN・ペコ女史の講演で引用される

* RDP…マンデラは民族和解・協調を呼びかけ、アパルトヘイト体制下での白人・黒人の対立や格差の是正、黒人間の対立の解消、経済不況からの回復として提唱した

日本の場合

「原子カムラ」、「公害ムラ」(宮本憲二)、「男のムラ社会」(溝口紀子)・・・スポーツ社会学者、バルセロナ五輪柔道銀メタリスト・・・柔道界では女性が冷遇されていたが、この間に勝利至上主義、派閥争い、利権・・・性と柔」河出ブックス)

四日市では「草の根封建おやし主義」?



117番学校



四日市公害の講義



大気汚染測定の実習



TCDC内で(エコグループリーダー
第3ホロー長、同リーダー、GC代表、巻
頭にカラー写真)